



シャマンの太鼓

ウイルタ

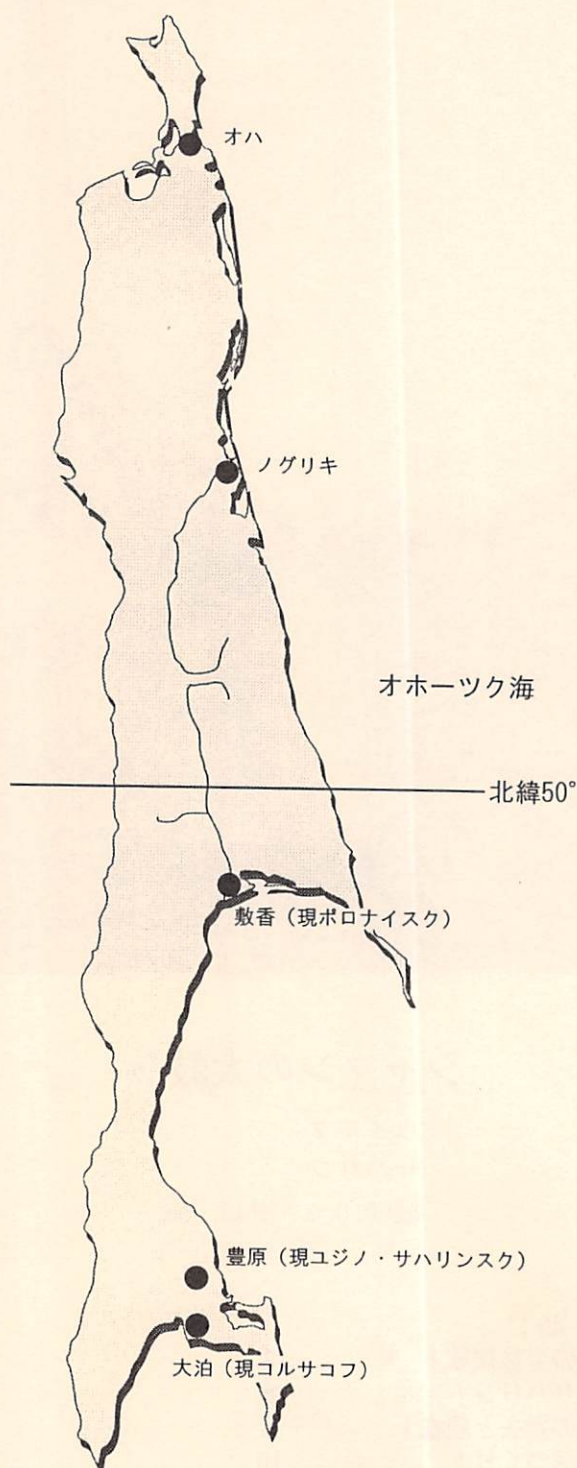
サハリン

縦60.0cm 横45.0cm

北方民族博物館だより
—第27号—

第12回特別展「樺太1905-45： 日本領時代の少数民族」	2
講演会「わたしのなかのサハリン」	5
講座「サハリン少数民族の過去と現在」	6
講習会「ウイルタのお人形づくり」	10
平成9年度地域国際フォーラム	11
News	12

樺太1905-45 — 日本領時代の少数民族 —



19世紀中頃まで、サハリンには南部にアイヌ、中央部にウイльта、北部にニブフといった民族が住み、伝統的な生活を続けていました。しかし日本、ロシアの進出にともない、サハリン島の領有は、日露雑居状態、樺太千島交換条約（1875年）によるロシア領化、ポーツマス講和条約（1905年）による北緯50度を境界とした日露分割統治状態、そして第二次世界大戦後のロシア領化と頻繁に交替し、少数民族の生活は翻弄され続けてきました。今回の特別展は、日本領時代にサハリンの北緯50度以南の樺太に暮らしていた少数民族に焦点を当て、日本人によって収集された民族資料や当時の写真資料などを通して、特にアイヌ以外の少数民族に焦点をしばり当時の生活を知っていただくことを目的としました。

* * *

■サハリン島と先住民

サハリン島には古くからアイヌ、ニブフ、ウイльтаといった民族が生活してきました。彼らは漁撈や海獣・陸獣の狩猟をおもな生業とし、互いに影響を及ぼし合いながらもそれぞれ独自の文化を育んでいました。

アイヌは、13世紀頃に北海道からサハリン島に移住したと考えられています。サハリンの南部に居住していた彼らは、エンチュウ、エンジュウという自称をもっていました。言語や風習は北海道のアイヌと大きな違いはありませんでした。

ニブフはアムール川下流域とサハリン島の北部・中部に居住してきた民族で、周辺のツングース系民族とは系統が異なる古アジア系民族と考えられています。夏季には高床式、冬季には竪穴式の住居をもちいていました。ニブフは、アイヌからは「スメレンクル」、ロシア人・日本人からは「ギリヤーク」と呼ばれていました。

ウイльтаはサハリン中部に居住してきた民族で、大陸部のツングース系民族と近縁関係にある



と考えられています。ウイльтаは移動・輸送のために数頭から十数頭のトナカイを飼育し、冬季はトナカイとともに移動するために円錐形のテントを、夏季は樹皮葺きの住居をもちいていました。ウイльтаは、アイヌからは「オロッコ」と呼ばれていました。

■アイヌの「指定地」

ポーツマス講和条約による領有後間もなく、行政機関である樺太庁は、日本から移住してくる移民や商人に不当に利用されるのを防ぐためとして、日本領の樺太内のアイヌを9つの「指定地」に居住させ、そこには日本人が住むことを禁止しました。「指定地」には子どもたちのための教育所がつくられ、日本の尋常小学校に沿った教育がおこなわれました。1933(昭和8)年にはアイヌに戸籍がつくられ、教育所は尋常小学校と改められました。アイヌは、もはや土人ではなくなり「日本国民」として位置づけられました。

■アイヌ以外の少数民族の「指定地」

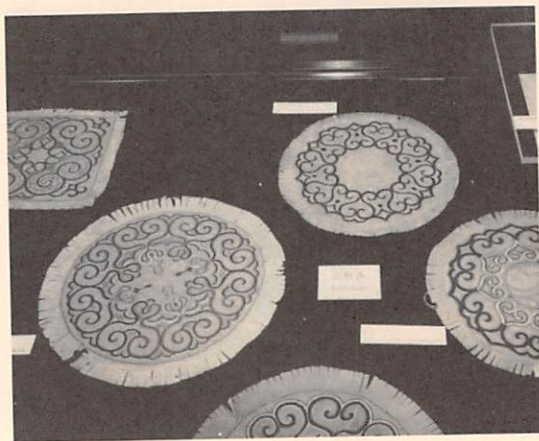
樺太には、ウリチ、エベンキ、サハといった新しく暮らし始めた少数民族もいました。樺太庁はアイヌと同様の理由で、アイヌ以外の少数民族に対しても「指定地」を用意しました。指定地が作られたのは1925、26(大正14、昭和元)年の頃で、場所は敷香町郊外の「オタス」というところでした。

■オタスの人びとの生活

当初、オタスでのウイльта、ニブフなど少数民族の生活は比較的自由で、生活に大きな変化はありませんでした。サケ・マス漁の時期に海岸にある日本人の漁場で働く者や、狩猟の腕を買われて北海道に出稼ぎに行く者もいました。1930(昭和5)年には教育所が設置され、オタスの子どもたちの同化教育がおこなわれました。教育所の教師は川村秀弥・なお夫妻で、毎年30人前後の少数民族の子どもに、日本人の子どもと同じ内容の教育をしました。学校での共通語は日本語でした。川村先生は、教師としての仕事の傍らオタスの人びとの生活の世話などもしていました。

■観光とオタス

少数民族が暮らす「オタスの杜」は、樺太の代表的な観光地でした。樺太の観光案内や旅行記な



どには、必ずといってよいほどオタスが「土人の都」、「土人の安住地域」、「極北の桃源郷」といったことばとともに登場します。

オタスでは、教育所の先生の指導で観光土産としての工芸品が産み出されました。財布やタバコ入れ、皿敷きなどの革製品は、オタスの女性たちによって、皮なめしや刺しゅう、独特の文様など、少数民族の伝統的な技術を生かす形でたくさん作られるようになりました。

■戦時下の少数民族

オタスに定住する以前には、サハリンの少数民族は自由に移動することができました。トナカイを使って国境とは無関係にツンドラ地帯を移動する少数民族に目を付けたのは、日本の軍隊でした。日本軍はオタスの多くの若者を集めて、スパイとしての訓練を施し、敗戦が近づく頃には国境付近でソ連側の様子をうかがわせたり、通信を傍受させたりしました。

敗戦後、日本のスパイ活動の一員として働いていたことがソ連の軍事法廷で裁かれ、多くの少数民族の若者がシベリアの刑務所に送られました。数年の刑期を満たして帰還した者もいましたが、刑務所で命を落とす若者もいました。



■オタスの人びとと研究者

アイヌ以外の少数民族が暮らすオタスには、観光客のほかに、言語学、民族学、人類学、生物学など、様々な分野の日本人研究者が訪れました。彼らの中に、少数民族を単なる「研究材料」として扱うような者がいたことは否定できません。しかし少数民族と対等の関係を形成すべく努力した者もあり、そのような研究者は少数民族からも慕われて、よき相談役となることもあったようです。

ニブフ語の研究者である服部健は、1937（昭和12）年から数回オタスを訪れ、言語の調査をおこなうとともに、ニブフの生活習慣、習俗についても詳細な調査をおこないました。ときにはニブフ語の研究に協力してくれる人を北海道に招いて調

査をおこなうこともありました。

また、洋画家の木村捷司は、オタスの人と土地に惹きつけられた芸術家の一人で、敗戦まで何度となくオタスに足をはこびました。木村はオタスに暮らす少数民族の生活をキャンバスにとらえました。また、めったによそ者を入れないシャマンの儀式のようすや、黙々と仕事をするニブフやサハをたくさんのスケッチブックの中にも書きとめました。

* * *

今回の特別展の入場者は約8,000名で、樺太という北海道との関連が深い地域がテーマだったこともあって、多くの方々にご観覧いただくことができました。当館では今後ともサハリンの少数民族に関する資料・情報の収集、研究活動を継続していく所存です。

■謝辞

本特別展の展示資料として、貴重な所蔵資料をお貸し下さった旭川市博物館、網走市立美術館、木村捷司記念室、市立函館博物館、資料館ジャッカ・ドフニ、函館市北方民族資料館、北海道大学農学部博物館、寺田弘氏、写真を提供して下さった河野廣氏、金喜多一氏、納谷忠久氏、資料の複写を許可していただいた株式会社国書刊行会、市立函館図書館、社団法人全国樺太連盟、北海道大学附属図書館に心より感謝申し上げます。

（学芸課 中田 篤）

「わたしのなかのサハリン」

講師：神沢利子（児童文学者）

第12回特別展開連行事の一つとして、講演会を開催しました。講師は、『くまの子ウーフ』『ヌーチェのほうけん』『流れのほとり』などの作品で知られる児童文学者の神沢利子氏でした。以下に概要を報告します。

* * *

私が樺太^{からよと}にいたのは1929～37年までなので、殖産興業の時期というのか、光の射していた時期においしいところをつまみぐいしたようなもので、樺太での戦争体験をしていない。このような場で、楽しかった子ども時代を語るだけでよいのかという後ろめたいような思いもあるが、それぞれの人一人一人の樺太を胸に抱いているのだから、私の中の樺太についてお話ししたい。

炭坑の技師^{しすか}だった父の仕事の関係で5歳のときに樺太に渡り、敷香（現ポロナイスク）近くの内路村内川というところで小学生時代を過ごした。仕事から子どもの目の高さで本を書くために子どもに返るのが習い性になっているので、そのことを鮮明に思い出す。複式学級の小さな学校で、晴れの日には野原で授業をし、休み時間にはキイチゴを摘んでほおぼった。冬には手作りスキーや長靴^{そり}を櫓^りがわりにして、子どもたちは何の道具もなくても楽しく遊んだ。

昭和9年にオタスの杜^{もり}へ行っったときのわくわくする気持ちは忘れられない。当時、楽しみにしていたのが少年講談の『山中鹿之助』とか少女倶楽部の『山姫神楽』など鹿に乗った子どものお話だったので、トナカイに乗った子どもを見て胸がどきどきした。ウイлтаのテントもお家ごっこのように見えたし、手提げ籠^{かご}を持った女の子もいて自然の中で遊んでうらやましいと感じた。先住民がおかれていた当時の社会的状況や苦しみは、小学5年生の少女には知る由もなかった。

豊原の女学校に進み、2年生のときに上京した。21歳で結婚をしたが、戦後は夫が職に恵まれず、私は病気がちで仕事もできない苦しい生活だった。そのようななか、子どもたちに自分の子どものころの話^{はなし}を聞かせることがあった。雪の中で福寿草を探して金色の花を見つけた際のときめき、



クマの足跡を見つけて大騒ぎして帰ったことなどを話すと「お母さんの育った樺太っていいところだねえ」と不思議そうに聞き入り、改めて幸せな子ども時代を認識した。

最初に本になった『ちびっこカム^{カム}のほうけん』は、『カムチャツカ探検記』を読み、主人公のカムにウイлтаの少年の面影を重ねて書いたものだ。動物たちの加勢で北斗七星のひしゃくを動かし、「天の川の水をかけて火山の火を消すぞ」とおどして火山に住む悪い大男を退治する話である。元気な話を書く自分も元気を取り戻すことができた。北方民族は私の原風景であり、知らなかった民族のことや動物のこともいろいろと調べて本を書いている。

子どもというものは何だろうとよく考える。子どもは人の原型であり、内なる子ども^{よみがえ}を蘇らせる^{よみがえ}と大人である自分も癒される^{いやす}ということが言われている。幼年は命の源であって、気づかぬうちに心を潤してくれているのではないか、幼年と老年の間は地下水のように通底していて、それに気がつくのが晩年かもしれないと思うようになった。

子どもは性も未分化なら、ものや人間以外の動物との境もないので、ものに話しかけたり、すぐに何かの動物になってしまえる。子どもは、動物や自然に対する尊敬^{いび}と畏怖^{おそ}を持っている。闇^{やみ}がなくなり、恐ろしいと思うものが無くなった現代の生活の中で私たちの命を活性化させるためには、子どもに返り、体内に自然をもう一度取り込む必要があると考えてしまう。

樺太は私にたくさんのお話を書かせてくれた。本を読んだ子どもたちの魂が元気になるように、お話を書くことによって樺太への感謝の気持ちを返したいと思っている。

サハリン少数民族の過去と現在

日時：平成9年9月20日(土)13:00-18:00 9月21日(日)9:00-12:15
会場：道立オホーツク公園センターハウス研修室

第12回特別展の関連事業として、講座「サハリン少数民族の過去と現在」を開催しました。以下に各講師の発表要旨を紹介します。

■河野本道氏（文化人類学者）「エンチュ（カラフト＝アイヌ）の人口と居住域の推移」

これまで「カラフト＝アイヌ」とか「エンチュ（エンヂウ）」と呼ばれる人々は、主にサハリン南部に居住していたアイヌ（民族）の一民族的集団と考えられていた。ところが、墓標の地域差からエンチュがかつて二つの民族的集団に分かれていた可能性が考えられる。そこでエンチュの人口および居住域の推移を歴史的に再検討することによって、改めてその理解を深めてみたい。

エンチュの墓標の形式：エンチュの墓標はサハリン東海岸と西海岸とで形状に大きな差異がある。東海岸の墓標は板状であり、西海岸の墓標は全体的に丸木状となっている。また、墓標の形からエンチュと北海道のアイヌの一部との間には近縁関係があるという推測がなされている。

エンチュの墓標の分布：エンチュの墓標は北海道にもみられる。樺太千島交換条約以前に北海道に移住していた西エンチュの墓標が余市町で知られているが、他にも天塩町、旭川市、松前町、青森県八戸市にそれらしきものがある。

エンチュの居住地：エンチュのサハリンにおける集落は、200年前頃には海岸部の広い範囲にわたって150～160ヶ所以上が点在していた。しかし、その後集落は次第に減少し、1911～1914（明治44～大正3）年の間には特定地への強制的な集住政策がとられたことにより、西海岸の鶴城管内を除いて9ヶ所になった。

エンチュの人口動態：樺太千島交換条約以前から北海道に居住していた人々を含めると、200年前頃のエンチュの総人口は3000人以上と考えられる。その後次第に減少し、1930年代半ば以降は1500人未満とされている。

日本国領北海道島へ移住したエンチュたち：樺太千島交換条約に伴って北海道に移住したエン

チュは移住当初841人いたが、天然痘、コレラにより343人が死去し、生存者はサハリンへ帰還し始めた。そして1906（明治39）年10月頃までには最後まで残っていた130余人が帰島した。

アイヌ系北海道出身者のサハリン島進出：1908～1911（明治41～44）年の調査によると、サハリン西海岸に7戸29人の北海道アイヌが居住していた。この「北海道アイヌ」は石狩地方のアイヌのことで、石狩川におけるサケの不漁や北海道に移住したエンチュが石狩地方に住んでいたという関係からサハリンに移住したものと思われる。

第二次世界大戦後の状況：戦後、サハリンに残ったエンチュは、「アイヌ」＝「日本国民」と同一視されることを避け、他の民族として登録したケースが多かったようである。一方、日本に移住したエンチュの多くは北海道に居住することになった。エンチュが樺太千島交換条約以前から北海道に居住していること、古代エンチュ文化である可能性を含むオホーツク文化の遺跡がオホーツク海沿岸に広く分布していることなどを考え合わせると、エンチュの主要な居住域はサハリン南部とは言えず、エンチュを「カラフト＝アイヌ」と呼ぶことは適切ではない。

19世紀初頭に3000人近く存在したエンチュは、約200年後のサハリンにおいては数人しか確認できなくなった。エンチュの主な居住地は北海道へと移っているが、「民族」の存立・発展が尊重されていたはずのソ連（現ロシア）で実質的にエンチュの姿が失われ、一方で「異民族」の存立に無理解だった日本において一部ではあるがエンチュ系の人々が「アイヌ」もしくは「ウタリ」を名乗ってその存在を主張している。このような現実には「民族」的集団の担い手たちが「多元的民族起源の諸民族複合的国家」において「国民」化したことを物語っているのではないだろうか。

※当講座の実施に際し、事情により講師のお一人である河野本道氏の講演を途中で打ち切りざるを得ない状況となりましたので、河野氏の講演内容については、予定原稿の要約であることをおことわりいたします。



■伊藤悟氏（北網圏北見文化センター）
「樺太のトナカイ王について」

私が日本領時代のサハリンにおける著名人、ウイノクロフについて調べるきっかけとなったのは、サハリンのポロナISK市立文化民族学研究中心の연구원ニコライ氏からの依頼であった。当時私は北見市立図書館に勤務していたので、図書館のレファレンスサービスの一環としてウイノクロフについての調査を開始した。市立北見図書館、道立図書館北方資料室、新聞社のデータベースおよび各関係者からの情報提供などにより、約80点の資料を収集することができた。今回の発表は、資料から明らかになったことに私なりの解釈を加えたものである。

* * *

いわゆる二重スパイとして有名となったウイノクロフは、1886（明治19）年に北シベリア、レナ川河畔の町で裕福なサハの家庭に生まれた。高等教育を受け、州の副知事などを経て、1908（明治41）年までにはサハリン北部に渡っていたと考えられる。何度かサハリン北緯50度以南の日本領への亡命を企てたが捕まり、ソ連のスパイになることを条件に、1926（大正15）年、約300頭のトナカイとツングースの使用人14.15人を伴って日本領に亡命した。

ただし亡命後ウイノクロフは情報をソ連に流さず、逆にソ連のスパイの情報を日本政府に流していたらしい。そのためか、未遂に終わったものの、1938（昭和13）年11月には日ソ国境で狙撃され、その後所在が一般書、新聞から消えてしまった。当時の思想犯やスパイの問題を扱った警察内の情報誌「思想月報」第75号（1940（昭和15）年）によると、狙撃事件にはウイノクロフの養子アンドレイの実父ニコライが関与していたということである。ウイノクロフ自身は、その後2年間スパ

イ容疑で警察の取り調べを受けたらしい。また、「思想月報」第94号（1942（昭和17）年）によると、養子アンドレイは1941（昭和16）年にソ連領に渡ったところを捕縛されてスパイを強要され、敷香でスパイ活動をしよとして逮捕されたということである。アンドレイはスパイ容疑で13年の刑を受けている。その後、ウイノクロフはおそらく1942（昭和17）年の4月頃に病死したものと思われる。

* * *

このように、「トナカイ王」、「二重スパイ」として名を馳せたウイノクロフもまた国家間の問題は翻弄される人生を送った一人であった。近年日露間の交流も盛んになってきているので、今後はウイノクロフの養子であったアンドレイのその後の消息について、もう少し調査をおこなってみたいと考えている。



■ウラジーミル・サンギ氏（作家）

「ロシアからみた今世紀のサハリンの少数民族」ニブフが世界と人間の誕生をどのように考えているか：ニブフの間に古くから伝わる神話によれば、ニブフはカラマツの樹液から誕生した。ニブフの皮膚の色はカラマツの樹皮の色なのである。また、ニブフの世界はタイグアートという神によって作られた。タイグアートが海から大地に上ると、上陸地点が湾となり、地上を歩いた跡は川となって魚が遡上した。

ニブフの記憶にあるニブフの歴史：ニブフは非常に古くから存在する民族であり、かつてはバイカル湖の東からアムール、サハリン、クリル（千島）、南カムチャツカ、北海道といった広い地域に住んでいた。ニブフには遠い道のりを旅した記憶があり、さまざまな類似点から、アメリカ・インディアンはニブフの子孫ではないかと考えている。また、1957年の中国の歴史書の調査から、約

4000年前にニブフが中国に使節団を送ったことが明らかとなった。

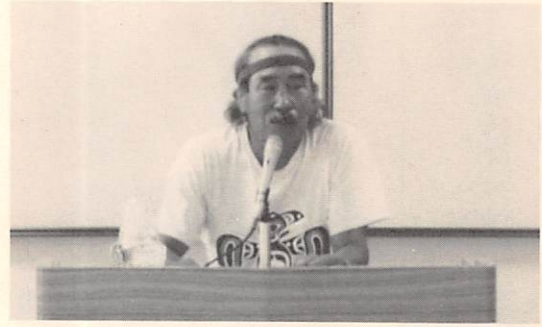
19世紀後半、日本とロシアがサハリンの天然資源の乱獲、自然破壊をおこなった。最も深刻だったのは先住民の受けた被害で、アイヌは北海道に移住させられ、ニブフは天然資源の枯渇によって貧しい状態に追いやられた。また、ソビエト政府はニブフの精神文化や言葉を根絶やしにした。

ニブフ族の精神世界と文化：ニブフの叙事詩は、数千年前から世界の誕生やニブフの歴史をおもに歌の形で語ってきた。1974年にこの叙事詩を録音したが、これがニブフの叙事詩に関する唯一の記録である。録音した当時は叙事詩を語ることができる人が20人いたが、現在では1人しかいない。精神文化を伝えるという点に関して、こういった状況になっていることは民族の悲劇である。

ニブフの部族の長老会について：1996年6～10月にかけてノグリキで開催された長老会（ニブフの部族の代表者・長老の集まり）において、ニブフ民族のさまざまな問題についての対応が決定され、宣言文が採択された。この宣言文は、日本、ロシアなど歴史的にニブフを不当に扱った国や現在大陸棚開発に関してニブフの権利を侵害している国に対して補償を求める内容であり、現在関係各国・各機関に送付し、回答を待っている状態である。

先住民族の問題についての解決の道：先住民に関する問題は、政治的・経済的・社会的に解決される必要がある。現在ロシアの国会では、問題解決の政治的部分を検討中である。経済的問題の解決のためには、天然資源・地下資源を先住民のものとする必要がある。また、社会的問題の解決のためには、土地の返還、伝統的文化・生活様式の回復が必要である。そのためにも、民族的特性（精神世界、文化、言葉）が復活されること、また先住民族の自治区を持つことが重要である。

これら先住民の問題に対して、どの民族出身であろうと、どこに住んでいる人であろうと、目を開いて一緒に検討していきたいと考えている。



■豊川重雄氏（札幌アイヌ文化協会代表）

「樺太アイヌと石狩・江別」

私は石狩町大字生振で生まれた。初めは生振で半農・半漁の生活をしていましたが、戦後ニシヤサケが取れなくなってきたので、札幌に出て、その当時観光土産として人気があったクマの木彫りをするようになった。札幌でいろいろな人との出会いを通じてアイヌとしての自覚が芽生えた。

1962（昭和37）年頃旭川市近文で大きなアイヌの祭があって、それに参加した。全道からアイヌが集まったが、その時に樺太アイヌが20～30人来ていた。石狩に樺太アイヌがいたということは母親から聞いていたが、実際に会ったのはそれが初めてだった。

それ以来、樺太アイヌのことは気にかかっていたが、1971（昭和46）年の北海道ウタリ協会石狩支部結成の際に石井清治氏と出会い、樺太アイヌの対雁移住の件を知らされた。そして石井氏、小川隆吉氏と3人で対雁の調査を開始した。しばらくして、樺太アイヌの血を引く人たちから話を聞くことができ、彼らとの話から、対雁で供養祭をしようという話になった。

しかし、対雁に樺太アイヌがいたということを示す資料が見つからないまま何年かが過ぎた。供養祭を始める1年くらい前に、江別市の真願寺で400名近いアイヌの戒名、俗名、没年月日などが記された過去帳が発見された。この発見がきっかけとなって、ようやく1979（昭和54）年に対雁で供養祭を開くことができた。以後毎年10月末頃に供養祭をおこなってきた。

また、道立文書館に樺太アイヌの資料があるという情報を得て行ってみると、実際に膨大な資料があった。資料を発見することができて嬉しい一方で、これまで大勢の研究者が何回も目を通していたのに発表しなかったという事実に対して怒りを覚えた。その怒りから、樺太アイヌに関する調

査の中間報告として『対雁の碑 樺太アイヌ強制移住の歴史』（樺太アイヌ史研究会編、北海道出版企画センター、1992年）を出版した。

まだまだやらなければならないことは山ほどあるが、大変な思いをしてきた樺太アイヌや遠方から供養祭に出席するために来てくれるアイヌの気持ちに答えなければならないという思いから、供養祭をこれまで続けていくことができた。樺太アイヌの強制移住は、日本にとっても北海道にとっても歴史の一部であり、もっと背景を掘り起こして事実関係を明らかにしていく必要があるのではないだろうか。

ここ数年は、供養祭をおこなうだけではいけないと思うようになってきた。記念碑の建設なども考えてはいるが、経済的な理由で実現できないでいる。今後は皆さんにもご協力いただき、供養祭の存在を大勢の人に知ってもらうためにシンポジウムを開催したいと考えている。

※樺太アイヌの移住

1875年の樺太千島交換条約成立にともない、841名のアイヌが北海道・宗谷に移住しました。日本政府は、石狩平野の開拓を理由に宗谷から強制的に対雁（今の江別市）に移住させましたが、対雁でコレラや天然痘の流行のため、約300人が亡くなりました。

■田中了氏（ウイльта協会事務局長）

「サハリン先住民族の過去と現在」

ツンドラに暮らす：かつてサハリン南部はアイヌ、ニブフ、ウイльтаの世界であった。北海道よりわずかに小さいこの島は亜寒帯に属し、冬季は大部分が氷に閉ざされる。ポロナイ川流域のツンドラ地帯は、サハリン南部でも各民族が混在する唯一の地域だった。

不幸と悲劇のはじまり：1875（明治8）年の樺太千島交換条約の結果、日露両国間の領土問題は一応の解決をみたものの、先住民族の意志とはまったく無関係な決定であった。ウイльта、ニブフなどの先住民は、ロシア領サハリンの住民となったが、生活はその後とも変わらなかった。

1905（明治38）年日露戦争後のポーツマス講和条約でサハリンは北緯50度線を境に日露両国に分断された。国境は北と南の親子・同族を分け、やがて敵味方として対立させた。

さらに1926（大正15）年樺太庁は保護という名目で少数民族をオタスに強制移住させた。オタスでは日本語の使用を強要され、名前まで日本名に改めさせられた。樺太先住民の子どもたちは「敷

香土人教育所」で軍国少年・少女として育てられた。

「軍国少年」たちのその後：1942（昭和17）年陸軍敷香特務機関は、オタスの青少年を「召集令状」で狩り集め、スパイ要員として北緯50度線付近での対ソ諜報・謀略戦に従事させた。

特務機関員にとっても広大なツンドラ地帯を突破するのは困難であった。そこで、トナカイとともに移動する生活を送っていたウイльтаなどの若者に目をつけたのであった。

1945（昭和20）年国境で上官たちに置き去りにされ、若者たちはやっとの思いでオタスに戻る。しかし、そこで彼らを待ち受けていたのはスパイ容疑による逮捕と戦犯としてのシベリア抑留であった。

ゲンダーヌの訴え：ウイльтаのゲンダーヌ（日本名：北川源太郎）が9年6ヶ月のシベリア抑留生活から解放され、舞鶴に来たのは1955（昭和30）年だった。彼は1975（昭和50）年に元軍人として日本政府に軍人恩給を請求したが、「樺太原住民に対しては兵役法の適用がなかった」ことを理由に却下された。やがて彼は日本名を棄て、デーヒンニュニ・ゲンダーヌとして戦争の罪悪を摘発し続けたが、1984（昭和59）年脳出血で急死した。

日本政府の戦争責任：1994（平成6）年10月ポロナイスタのウイльта、ニブフの女性たちは、日本政府に対して謝罪と戦後補償を求める声をあげ、サハリン先住民族遺族会を結成した。その1ヶ月前、遺族会結成の中心メンバーは戦後補償を求める手紙を村山首相（当時）に送付していたが返答はなかった。そこで遺族会の代表2名が来日し、日本政府の謝罪などを求める要請書を五十嵐官房長官（当時）に手渡した。しかし、いまだに回答はない。日本政府の戦後責任が国際的にも問われている今日、サハリン先住民族の戦前・戦後に光を当て、きちんと回答を出すべきではないだろうか。



ウイルトのお人形づくり

講師：北川アイ子氏

(資料館ジャッカ・ドフニ館長)

資料館ジャッカ・ドフニの館長北川アイ子氏を講師に迎え、講習会「ウイルトのお人形づくり」を開催しました。ウイルトの人形「ホホ」は、サハリンの先住民であるウイルトの少女たちが木や草の葉、布などで作って遊んでいたものだそうです。

講習会には、道外からの多くの参加者を含め、幅広い年齢層の人が参加しました。

* * *

今回は材料として布、綿、糸をもちい、針、ハサミ、鉛筆くらいの太さの棒といった道具を使って作りました。

まず最初に正方形の白い布で綿を包み、開いている部分を糸で巻いて縫いつけて頭の部分を作ります。ちょうどてるてる坊主のような状態です。このとき注意することは、綿の量や布の張り具合を調節して顔にしわが寄らないようにすることです。その後三角形に切った黒い布をほおかぶりのようにして頭にかぶせ、首の所を糸で巻いてから縫いつけて頭の完成です。

次に胴体を作ります。白い布を袋状に縫い、裏返しにして縫目を内側にしてから中に綿を詰めていきます。このとき鉛筆くらいの太さの棒を使って、綿を奥の方まで詰め込むのが形良く作るコツです。胴体が出来たら、袋の口の部分に頭の下の部分を入れ、糸で巻いて縫いつけます。胴体と同様に腕も作ります。腕のほうが胴体よりも細いので、綿を詰め込むのがもっと難しくなります。両腕が出来上がったら、胴体に縫いつけて体の完成です。

最後に衣服を作ります。まず人形の体に合わせて柄物の布を切り、頭が通る部分と袖や裾の部分の形を整えるように布を切り取って上着の形を作ります。次に袖口を残して両脇を縫いつけて上着の出来上がりです。別の色の布で帯を作り、腰に巻いて衣服が完成です。服の形や帯の色・模様、それぞれの組合せなどは参加者の好みが出せる部分なので、各自思い思いの工夫を凝らしていました。



* * *

参加者の皆さんは、手際の良い講師のスピードになかなかついていけず苦勞していました。また頭と胴体を縫いつけるところなどの要所では、自分の人形を講師のところに持って行って直接指導を受けるといった場面もたびたび見られました。

細かい作業が多かったので、子どもや裁縫に不慣れな人にとってはやや難しい講習会となりましたが、中には手慣れた様子で上手に仕上げる方もいらっしゃいました。

参加者からは「女の子が人形の服を縫うことによって次第に裁縫の技術を身につけていったのね」といった声が聞かれ、ウイルトの女の子の生活に思いを馳せている様子も見られました。また、参加した学生さんたちも、お互いに「ゼミより真面目にやっている」などとひやかしながらも、真剣に手を動かしていました。多少予定時間を過ぎてしまいましたが、参加者の皆さんに満足していただいた講習会だったと思います。



平成9年度地域国際交流フォーラム

会場：網走セントラルホテル／網走婦人会館
北海道立北方民族博物館

近年、国際交流の進展時代をむかえ、地域の市民にとっても異なった文化をもつ人びとの交流の機会が増えてきています。このことから、財団法人北方文化振興協会では、国際交流に関する学習機会を提供する指導者の要請を目的として、平成7年度より北海道教育委員会の主催する当フォーラムを網走市において実施してきました。今年度は北海道在住外国人約40名を含む約200名の社会教育関係者、一般道民の参加者があり、2日間にわたって事業が実施されました。

最初に比較食文化研究家の吉田よし子さんによる「食文化からみた異文化」と題した講演があり、世界のさまざまな食文化にかかわる習慣や価値観の違いなどが紹介されされました。

続いての事例発表では、各テーマにしたがって3名の発表が行なわれました。北見工業大学の大学院に留学しているバングラディッシュ出身のサルダール・シャヒーンさんは「留学生をめぐる国際交流」をテーマに2年間の留学経験から異文化を理解する視点についてユーモアたっぷりに発表されました。次のテーマ「身近な国際交流」では網走管内に在住の浅山美保さんが、民間ボランティア組織の国際援助活動の体験を発表されました。浅山さんは幼児教育の海外協力隊員としてボリビアに派遣された経験もち、帰国後、同じ体験をもつ同僚と「イリマニの会」を結成し、ボリビアで保育園を運営するなどボリビアの幼児教育の支援活動をされてきました。3つめのテーマ「姉妹都市交流」については、網走管内佐呂間町で語学指導助手をされているジョージ・カーテさんが発表されました。地球物理学の研究者として長くアメリカ・アラスカ州の津波警報センターに勤務するかたわら佐呂間町と姉妹都市の関係にあるアラスカ州バーマー市の市長を務めていたカーテさんは、元市長という立場で、姉妹都市の縁組を結ぶ上での心構えや要件、さらに姉妹都市交流を実践していく上での留意点などを述べられました。

次の3つの分科会では、事例発表を基に各事例発表者も交えた意見交換が行なわれ、第1分科会

は「教育文化の国際交流」について東京農業大学生物産業学部助教授の境博成さんを助言者に、第2分科会では「身近な国際交流」について北海学園北見大学教授のグラハム・ハードさんを助言者に、さらに第3分科会では「姉妹都市交流の推進」をテーマに姉妹都市交流に関わり、ご自身でも身近な国際交流を実践してきた網走南ヶ丘高校教諭の尾上満昭さんを助言者に、熱心な意見交換が行なわれました。

2日目の午前は韓国料理、七宝焼、ネイチャーゲームの3部門に分かれて体験交流が行なわれました。韓国料理は網走市内の下道孝愼さんを講師に「ビビンバ」「チキンスープ」の調理体験を、七宝焼は網走七宝焼友の会の4名の講師の指導でブローチの製作、そしてネイチャーゲームは駒田敦さん、中村典代さんを講師に行なわれました。

2日目午後は北方民族博物館を会場に映像フォーラムおよび講義が行なわれました。映像フォーラムは当館の渡部学芸課長を講師に、カナダ国立映画制作庁制作の「ミスタッシニのクリーの獵師」を上映し、北方諸民族に共通する文化や精神世界を解説しました。さらに常設展示の視察も行なわれ、北方諸民族の文化を通じた異文化理解を深めることができたのではないのでしょうか。



■寄贈資料紹介

- 写真：旭川市の河野廣氏から樺太の写真6点が寄贈されました。
- サケ漁用鉤^{カギ}：網走市の寺田弘氏からサケ漁用鉤1点が寄贈されました。
- アザラシ毛皮：遠軽町の鈴木安太郎氏からアザラシ毛皮6点が寄贈されました。
- 石錘：網走市の木村直人氏から石錘1点が寄贈されました。
- 火打ち石：ロシア・ノグリキ市のウラジーミル・サンギ氏から火打ち石1点が寄贈されました。

■執筆・出版社から贈呈を受けた書籍・ビデオ（7～9月）

- ・大林太良 1997 『北の人 文化と宗教』 第一書房
- ・小谷凱宣 1997 『欧米アイヌ・コレクションの比較研究』 名古屋大学大学院人間情報学研究科
- ・朝克・津曲敏郎 1997 『中国ツングース諸語対照基礎語彙集』 小樽商科大学言語センター
- ・東京敷香会・ツンドラ会 『幻映樺太の面影』（ビデオテープ）
- ・日本海セトロロジー研究グループ 1996 『日本海セトロロジー研究 日本海の鯨たち6』
- ・釧路アイヌ文化懇話会 1997 『久摺6』
- ・宮岡伯人 1997 『環北太平洋の危機に瀕した原住民言語に関する緊急調査』
- ・吉田よし子 1993 『熱帯のくだもの』 楽游書房 他2冊

・渡辺 仁ほか 1997 『平成8年度 アイヌ民俗文化財調査報告書』

■主な来館者（7～9月）

- 7/30 国士館大学教授 大沼克彦氏 他5名
- 7/31 在札幌米国総領事 マレーネ・サカウエ氏 他2名
(財)大阪府文化財調査研究センター 合田幸美氏 他1名
- 9/14 國學院大学教授 梶山林繼氏 他1名

9/20 オホーツク文化の枝幸・ウバト マナイチャシ跡で樹皮容器、石器製作場を発見/D(夕)

9/24 伝統伝えるアイヌの祈り 旭川市神居古潭で「こたんまつり」神々にイナウなどをささげる「カムイノミ・イナウ」の儀式/Y

*AS:朝日新聞、T:北海タイムス、D:北海道新聞(夕:夕刊)、Y:読売新聞 複数紙掲載の場合は、扱いの大きい方を紹介しています。

■その他の行事報告

- 7/12 博物館クラブ「北方のあそび」
- 9/27 博物館クラブ「ウイльтаのお人形つくり」

◇◇職員の異動◇◇

- ・転出(7/31付)
主任学芸員 青柳文吉
(北海道立文学館へ)
- ・採用(9/1付)
学芸員 稲垣はるな

みんぞく
こうこ in HOKKAIDO
はくぶつかん (7～9月)

※このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 7/11 礼文町「香深井5遺跡」で人骨の残っている墓穴と竪穴式住居跡を発掘/A S
- 8/16 サハリン・ポロナイスクに北方少数民族の合同慰霊碑完成/T
- 8/21 平取町二風谷で「チブサンケ」(舟おろしの儀式)世界一の丸木舟が進水/T
- 8/31 サハリンでウイльта語の教科書作り・北大名誉教授の池上二良さん全面協力/D

☆観覧者動向（7～9月）

	(名)	
	常設展示	特別展
7月	4,539	1,277
8月	8,795	4,678
9月	5,289	2,026
計	18,623	7,981

§編集後記§

夏休みにサハリンに行き、博物館などを見学してきました。常日頃英語力のなさに悩んでいましたが、サハリンではロシア語の必要性を痛感しました。(中田)